祖形 *-ga, *-ti, *-ma の日本語反映形(後編)

近藤健二

アジア太平洋諸語は一つの系統樹を構成する。筆者のこの想定は，アジア太平洋諸語が幾千もの言語に分岐する前段階,すなわちアジア太平洋祖語に, *-ga と *-ti と *-ma という格標識が存在したことを前提にしている。こういう前提に立ち，前稿(2003)では, 格標識 *-ga, *-ti, *-ma が古代日本語の中で副詞・連用形接辞, 連体形・属格接辞，主格・強意接辞，名詞化接辞になったことを論じた。本稿は，その延長線上の議論として, 同じ格標識 *-ga, *-ti, *-ma が古代日本語において過去・完了形・形容詞接辞，已然形接辞，終止形接辞になったことを論じようとするものである。

１ 過去形・完了形・形容詞接辞

本節では，古代日本語における助動詞群の中の -k i と -tu と -nu の起源，および古代日本語の形容詞接辞 -ši の起源について考察する。-ki は過去の出来事の回想を表す助動詞であり，-tu と -nu は完了を表す助動詞であると言われている。形容詞接辞の -ši は，まさしく形容詞を形容詞たらしめている接辞である。

(1) **帰りける人来(きた)れりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて(『万葉集』3772)**
(2) **妹(いも)が見て後も鳴かなむほととぎす花橘を土に散らしつ(同1509)**
(3) **印南野(いんなみぬ)は行き過ぎぬらし天伝(あまづた)ふ日笠(ひがさ)の浦に波立てる見ゆ(同1178)**
(4) **父母(ちちはは)を見れば貴(たふと)し妻子(めこ)見ればめぐしうつくし(同800)**

上に例示した -ki, -tu, -nu, -si はいずれも終止形接辞である。これらの接辞の活用形のすべて，すなわち終止形，連用形，連体形，命令形を以下の＜表1＞に示す。

＜表1＞過去形・完了形・形容詞接辞の活用

	過去形	完了形		形容詞
終止形	-ki	-tu	-nu	-ši
未然形-	-še[1]	-te	-na	-(ši)kara
連用形	—	-te	-ni	-(ši)ku/-(ši)kari
連体形	-ši	-turu	-nuru	-(ši)ki/-(ši)karu
已然形	-šika	-ture	-nure	-(ši)kere
命令形	—	-teyo-ne		-(ši)kare

詳細はあとで展開するとして，先まわりして結論を述べておくと，これらの接辞の中核部分は *-ga **と** *-ti **の奪格的用法用法から生じたものであり，活用を支えた補助的部分は** *-ga **と** *-ti **の属格・具格用法，および名詞化接辞としての用法に由来するものである。このことを論じるための導入として，まず，アジアの諸言語において過去形・完了形接辞がどのようなものであるかを示してみよう。**

1)**古代チュルク語：** -tï(**完了Ⅰ，確定**)
-yuq(**完了Ⅱ，確定**)
-mïs(**完了Ⅲ，不確定**)
-ar(**アオリスト**)
2)**トルコ語：** -dI/-tI[2] (**過去**)
-mIş(**完了，伝聞過去**)
3)**モンゴル語：** -(ə)b/-səŋ(**単純過去**)
-lā/-lō/-lē/-lȫ(**経験過去**)
-džē/-tšē(**伝聞過去**)
4)**満州語：** -xa/-xə/-xo(**過去**)
5)**ギャロン語：** -s(**完了**)
6)**カチン語：** să-(**完了**)
7)**ナシ語：** -se(**完了**)

[1] サ行音は，今日では[sa] [ʃi] [su] [se] [so]であるが，室町時代には[sa] [ʃi] [su] [ʃe] [so]であったことが知られている。上代語の音声に関しては定説を得ていない。なお，未然形の-šeは動詞「為(す)」の未然形であるという説もある。

[2] Iは，母音調和によって母音がɪ～u～i～üと交替することを表す。

8)ティプラ語：　　-kka/-ka(過去)，-kkɔ(完了)
9)ハニ語：　　-a(完了)
10)リス語：　　-ua(完了)
11)ロロ語：　　-lo/-o(過去)
12)中国語：　　-le(完了)

上に示した形態はおおかた，*-ti か *-ga の反映形と見なすことができる。古代チュルク語の -tï[3]やトルコ語の -dI/-tI は言うまでもなく，モンゴル語の -ǰæ/-tšæ も，ギャロン語の -s，カチン語の sǎ-，ナシ語の -se なども *-ti の反映形であろう。一方，ティプラ語の -kka/-ka と -kkɔ は明らかに，また満州語の -xa/-xə/-xo やハニ語の -a やリス語の -ua もおそらく，*-ga を引き継いだものである。また，古代チュルコ語の -yuq は *-ga の反映形を二つ重ねたものであると考えられる。さらに，*-ga は *-ɣa に，*-ɣa は *-ra に，-ra は -la に変わりうるので，モンゴル語の -lā/-lō/-lē/-lȭ とロロ語の -lo/-o も *-ga に溯る形態であると見るなしうる。ところで，中国語の -le(了)というのは「終結する」という意味の動詞に由来するものであり，たとえばロロ語の -lo/-o はそれと同源であるという解釈も成り立ちはするけれども，筆者の考えるところ，中国語の動詞 liǎo(了)は完了形接辞から派生したものである。そしてその完了形接辞は，*-ga に由来するものである。

上述のとおりアジアの諸言語の過去形・完了形接辞が *-ti と *-ga に溯るものであるならば，日本語の過去形接辞-kiと完了形接辞 -tu もそれと同源である可能性がきわめて高い。おそらく，-ki の前身は *-ka であった。そして *-ka は連用形接辞 -i に接続したために，*-ika＞-iki という変化が生じたと推定される。また，-ki の未然形 -še と連体形 -ši は *-ti を，已然形 -šika は *-ti と *-ga の両方を継承したものであると考えられる。あるいは，終止形 ki に *-ti の反映形が見られないことや，未然形 -še と連体形 -ši に *-ga の反映形が見られないことを考慮すると，過去形接辞の終止形 -ki はもともと *-šika であり，これが母音調和を起こして -šiki となった後に -ši が脱落して成立したと仮定することも可能である。このように言うと，已然形 -šika の存在が怪しく思われるかもしれないが，已然形というのは下に -ba,-do,-domo を伴うことが多かったので -šiki とはならなかった，と考えれば一

[3] 庄垣内(1989:948)に「-tï が，名詞構成接尾辞 -t に3人称所有の -ï のついた形式から発達した」という記述が見受けられるが，このような見解には納得できない。

応つじつまがあう。しかしいずれにせよ，過去形接辞の -ki に関しては，その活用形の形成にまちがいなく *-ga と *-ti の反映形の両方がかかわっている。

活用形の形成に *-ga と *-ti の反映形がかかわったのは，完了形接辞の -tu と -nu についても同じである。しかし -tu と -nu の場合，とくに -n に関しては活用形の組成が単純である。-nu の格用形は *-ga の反映形が基盤となり，それに活用変化のための接辞が付加されている。付加されている接辞は，未然形接辞の -a（＜*-ga），連用形接辞の -i（＜*-ti），連体形接辞の -ru（＜*-ga），已然形接辞の -re（＜*-ra＋*-i）である。命令形接辞の -ne は，-nu に 具格接辞 *-ti の反映形 -i が付されたもの，つまり一種の連用形ないしは中止法から生まれたものではないかと思われるが，確かなことは分からない。

一方，-tu の場合，付加されている接辞は連体形接辞の -ru（＜*-ga），已然形接辞の -re（＜*-ra＋*-i），命令形接辞の -yo（＜*-ga）である。未然・連用形接辞の -te，および命令形接辞 -teyo の -te は，具格接辞 *-ti から派生した連用接辞が完了形接辞の一部として取りこまれたものである。なお，命令形接辞の -yo は筆者が視点標識と呼ぶものから派生した形態であり，その究極の起源は具格接辞の *-ga にある。

以上のように，過去形接辞 -ki と完了形接辞 -tu は *-ga と *-ti に溯る形態であるのだが，それらの核心的意味，つまり過去・完了という意味を生んだのは奪格接辞としての *-ga と *-ti であった。*-ti はもともと奪格接辞であったが，*-ga の奪格用法は属格接辞から派生したものである。ビルマ語では，-ká/-gá が「〜から」という奪格的意味で普通に用いられる。ちなみに，日本語の -kara とアイヌ語の -’okakara「〜から」の- ka は *-ga の反映形であり，-ra もおそらく *-ga＞*-ɣa＞-ra という変化によるものである。日本語の -kara は「そのものの本性・在り方・性質」などを意味する体言性の「柄（から）」から派生したという考えが定説となっているが，事実はむしろ逆であろう。すなわち，奪格接辞あるいは所格接辞の *-ti から「地」が生まれたように，奪格接辞の -kara から「柄（から）」が生まれたのではないかと思われる。

さて，奪格接辞が過去・完了形接辞になった過程は次のとおりである。奪格接辞は「〜から」という意味を表したが，これが「それから」「それ以来」「ずっと」という副詞的意味を派生させた。英語の since が「〜から」という意味から「それ以来」という意味を派生させたようにである。そしてこの副詞的意味を担った *-ti と *-ga，あるいはその反映形が付加された動詞は継続の意味を表すようになった。知里(1974a:352)によると，アイヌ語の幌別方言では動詞に -či が付くと群在・継起・継

続を表すというが，この -či は奪格接辞 *-ti の流れをくむものであろう。

このようにして生まれた継続の意味が完了の意味に転じるのは困難なことではない。「今雨が降っている」の「ている」(継続用法)と「彼はもう起きている」の「ている」(完了用法)を比べたり，英語における完了形の継続用法を思い浮かべたりすれば分かるように，継続という概念は完了という概念と密接につながっているからである。そして完了という概念は過去という概念ともつながっているので，完了形は過去形に転じることができた。言語によっては，同じ起源を有する二つの形態のうちの一方を過去形の標識にして，他方を完了形の標識にしている。古代日本語では，*-ga と *-ti の反映形が共同して過去形・完了形接辞を形成している。

ここまでは過去形・完了形接辞の -ki と -tu についてそれらがどのように成立したものであるかを述べてきたが，形容詞接辞-šiの起源も過去形・完了形接辞のそれと基本的に異ならない。すなわち，-ši は奪格接辞 *-ti の反映形であり，本来は継続あるいは状態を表すためのものであった。たとえば aka-ši「赤し」について言うと，この語形の本来的意味は「赤い状態である」であったと考えられる。ところで山浦(1989:222-223)によると，岩手県気仙郡の方言にはたとえば yama dar「山だ」とか rippa dar「立派だ」というぞんざいな表現に対して yama sï「山です」とか rippa sï「立派です」という丁寧表現があるというが，この文末辞 sï の来源は形容詞接辞 -sï のそれと同じであろう。

最後に形容詞における活用形の組成について一言しておくと，未然形接辞の -kara は連用形接辞の -ku に動詞「有り」の未然形 -ara が付加された *-kuara が縮まったものである。同様に連用形接辞の -kari，連体形接辞の -karu, 已然形接辞の -kere, 命令形接辞の -kare も，連用形接辞 -ku に「有り」の連用形 -ari，連体形 -aru，已然形 -are，命令形 -are が付されて生まれたものである。なお，已然形接辞の -kere は *-kare が母音調和を起こしたものと見てよい。

2 已然形接辞

已然形にはいくつかの用法が認められるが，その原初的用法はいわゆる已然形の順接的用法，つまり「～から」「～ので」という「順接の確定条件」を表すものであっ

たろう。下にその例を示す。

(5) ささの葉はみ山もさやに乱(みだ)れども我は妹(いも)思ふ別れ来ぬれば(『万葉集』133)
(6) 我が背子(せこ)がかく恋ふれこそぬばたまの夢(いめ)に見え つつ寝(い)ねらえずけれ
(同639)

上の(5)の「来ぬれば」は「来たから」という意味を，(6)の「恋ふれ」は「恋しく思われるから」という意味を表す。このように -ba の有無が意味の違いを生まないという事実と，-ba を用いない表現が奈良朝の日本語にだけ見られるという事実から，-ba の付かない表現のほうが古い用法であると判断される。そこで，已然形が表す「〜から」「〜ので」という意味がどうして生まれたかを解き明かすことが已然形の起源を明らかにすることにつながる。

さて大野(1982:185)は，已然形の「奈良朝の形」と「推定の古形」とを以下のように記述している。

	奈良朝の形	推定の古形
有り(ラ変)	are	*ar-ai
咲く(四段)	sakɛ	*sak-ai
去(い)ぬ(ナ変)	ine	*in-ai
為(す)(サ変)	sure	*s-urai
来(く)(カ変)	kure	*k-urai
起く(上二)	ökure	*ökö-urai
尽(つ)く(上二)	tukure	*tuku-urai
開(あ)く(下二)	akure	*aka-urai
見る(上一)	mire	*mi-re

そして大野は，推定した古形の接辞 -ai に已然形の本質が隠されていると見て，以下のように述べている。

> 已然形の史前の古形を推定する手懸りは，四段活用の已然形である。そこにはエ列乙類 ɛ が現れて，命令形のエ列甲類 e と明瞭な対立を示している。ɛ は ai という母音連続の縮約形として現れるものであるから，その古形は ai であったであろう。この ai はいかなる意義を担っていたか。それは已然形の古い機能から推考される。すでに知られているように，已然形は，コソの係りの結びとして現れるが，コソの係りが無くても，また，「ば」「ども」を従え

> ることが無くても，既定の条件を表すものであり，順接にも逆接にも用いられて，……タノデ，……ダッタカラの意と，……タケレドの意との双方を表し得たものである。語幹子音終止形式についた ai が，いかなる実質概念を表す語の転であるか，未だ詳かにすることが出来ないのは遺憾であるが，混合形式の形 urai は，「居」の変化形(已然形)が語幹に附着したものであることは，まず誤りないであろう。上一についた re は，アリの已然形語尾がついたものに相違ない。(p.185)

大野が「既定の条件」を表す形態として*-aiという接辞を想定したのは卓見である。しかし上の主張は，細部において二つの問題を含んでいる。

一つは，「…タノデ，…ダッタカラの意と，…タケレドの意」という記述から知られるように，*-aiを過去・完了の意味と結びつけていることである。上の(6)の例からも分かるように，已然形自体は過去・完了の意味を含んではいない。そのような意味を表すには，(5)の例におけるように過去あるいは完了を表す助動詞が用いられた。

もう一つの問題は，サ変・カ変・上二段・下二段活用の已然形が動詞「居(う)」の已然形を動詞語幹に付着させたものであり，上段活用の已然形が動詞「有(あ)り」の已然形接辞を付着させたものであるという仮定である。おそらく大野は，已然形が過去・完了の意味を内包するという前提に立ったうえで，その意味を「居」や「有り」が担ったと考えるのであろうが，では，四段活用やナ変活用をする動詞はなぜ「居」や「有り」と無縁であったと見なすのか。この点に関する説明が欠落している。

以上のような問題点を含んではいるものの，大野の指摘は已然形の出自を明らかにするための出発点となる。すなわち，已然の起源を明らかにする手掛かりは*-aiの組成を分析し，それと「〜から」「〜ので」という意味との関連性を追究することによって得られる。

筆者の考えでは，*-ai は名詞化接辞としての *-ga の反映形 *-a と具格接辞としての *-ti の反映形 *-i とが合体したものである。そして，*-a は子音語幹の動詞に見られる未然形接辞の -a と同類であり，*-i は連用形接辞の -i と同類である。そしてまた，*-a は未然形接辞 -a と同様に子音語幹の動詞にのみ付せられた。母音語幹の動詞に付されたのは，*-ra という接辞である。筆者が仮定する動詞已然形の組成は，以下の＜表2＞のようにまとめられる。

＜表2＞動詞已然形の組成

咲く(四段)： *sak-a-i＞sakε [4]
有り(ラ変)： *ar-a-i＞are
去ぬ(ナ変)： *in-a-i＞ine
見る(上一)： *mi-ra-i＞mire
起く(上二)： *öku-ra-i＞ökure
蹴る(下一)： *kuwe-ra-i＞kere
開く(下二)： *aku-ra-i＞akure
為(サ変)： *su-ra-i＞sure
来(カ変)： *ku-ra-i＞kure

この表の正当性を裏付けるために，いくつかのことを述べなければならない。一つは語幹についてである。サ変活用の「為」とカ変活用の「来」について大野が *s- **と** *k- **を語幹としているのに対して，筆者は** *su- **と** *ku- **を語幹と見なした。こうしないと名詞化接辞として** *-ra **を設定できないという事情があるけれども，** *su- **と** *ku- **というのは未然形の語幹でもあったと見なされる。大野(1982:186)は「為」と「来」の未然形の成り立ちを** *s-ö>se, *k-ö>kö **としているが，** *-ö **という接辞の由来を説明していない。「為」の未然形は** *su-i＞*sö>še**，「来」の未然形は** *ku-i＞kö **という変化の結果であると見るほうが妥当であろう。そもそも語幹というのは，それぞれの語において一定不変ではない。そこでたとえば，「為」と「来」の連用形が** *s-i＜si，*k-i＞ki **というふうに子音語幹をもとにして形成されたとしても，このことは同じ語の已然形と未然形が母音語幹をもとにして形成されたという仮定と矛盾しない。同様に，上二段活用の「起く」の已然形語幹を嗅u-と見なしたことは，「起こる」「起こす」という動詞の活用語幹を嗅　と見なすことと何ら矛盾しない。従来の研究は，語幹の設定の仕方にいささか柔軟さを欠いていたように思われる。**

次に *-a **と** *-ra **が名詞化接辞であることに触れるが，これについては多くを語る必要はない。** *-a **と** *-ra **を名詞化接辞と見なしたのは，一つには後続する** *-i **を具格接辞として認定したことによる。つまり，具格接辞は体言に付属するもので**

[4] エ列乙類の ε は，古代語では，ケ[kε]，ヘ[φε]，メ[mε]，ゲ[gε]としてのみ現れる。かつては，これ以外の形で ε が用いられたのかもしれない。

あるから，*-a と *-ra は名詞化接辞にちがいないというわけである。しかしもちろん，*-a と *-ra は形態的にも名詞化接辞として認定される資格を有している。-a が子音語幹の動詞における未然形を構成する要素であり，未然形が名詞化された動詞としてはじまったものであることはすでに述べたとおりである。一方，-ra が名詞化接辞たりうることは，これもまた前稿で指摘したように，「為(す)らく」や「来(く)らく」などの「ク語法」に現れる -ra が名詞化接辞であることによって，また「枕」や「桜」などに見られる -ra が名詞化接辞から生まれた一種の名詞であることによって明白である。

*-i が具格接辞であることにも補足的説明を加えておこう。具格接辞が副詞・副詞句・副詞節をつくる接辞になったこと，また具格接辞としての *-ti の反映形 -i が連用形接辞になったことは前稿で指摘したが，已然形を構成した *-i も当初は連用形接辞の -i と同種の機能を果たすものであったと考えられる。つまり，已然形は連用形の一種としてはじまり，そこから「順接の確定条件」を表す用法が派生し，さらにそれが「逆説の確定条件」を表す用法や「反語法」と呼ばれる用法を生んだのであろう。そして，已然形に複数の用法が生まれたとき，已然形本来の「順接の確定条件」を明示するために -ba という接辞が付せられるようになったと考えられる。この -ba は -wa と同源で，具格接辞の *-ga に溯るものであることを付言しておきたい。

本節の最後に，形容詞の已然形と動詞「有り」との関係を指摘しておく。形容詞の已然形接辞は，連用形接辞 -(ši)ku に動詞「有り」の已然形 are が付属した *-(ši)kuare が *-(ši)kare を経て -(ši)kere になったと考えられる。*-(ši)kare＞-(ši)kere という変化は，已然形接辞を命令形接辞の -(ši)kare と区別するためであったろう。

３ 終止形接辞

ここでは動詞の終止形接辞が格標識に由来するものであることを論じる。しかしその前に，終止形の起源に関する二つの先行研究に論評を加える。一つは，大野(1982:182-183)の所説に対してである。そしてもう一つは，ミラー(1986:74-76)の所説に対してである。

大野によれば，動詞終止形の「奈良朝の形」と「推定の古形」は以下のとおりであ

る。

	奈良朝の形	推定の古形
有り(ラ変)	ari	*ar-i
咲く(四段)	saku	*saki-u
去(い)ぬ(ナ変)	inu	*ini-u
為(す)(サ変)	su	*si-u
来(く)(カ変)	ku	*ki-u
起く(上二)	öku	*ökï-u
尽(つ)く(上二)	tuku	*tukï-u
開(あ)く(下二)	aku	*akɛ-u
見る(上一)	miru	*mi

大野は,「推定の古形」における *-u が「存在する」という意味の動詞「居(う)」に由来するものであり,ラ変活用の *ar-i に *-u が付かなかったのは *ar-i が「居(う)」の意味を含んでいたからであると説いている。また大野は,終止形接辞はもともと *-i であり,*-i が前の母音と結合して実質的意義を失ったころに「居(う)」が付加されたのだと言う。そして,*-i も「有り」と同義の語であったろうと述べている。

このような論を支えるために,大野は,琉球語の那覇方言において「ある」が aŋ であり「咲く」が satʃuŋ であること,つまり satʃuŋ が「連用形+居(を)り」に相当する形の *satʃi-wuŋ から生まれたものであるという考えや,今日の土佐方言でたとえば「雨が降りう」という表現が「雨が降りよる」と同義で用いられる事実を傍証とする。また,*-i が「有り」と同義の語であったという仮定の傍証として,朝鮮語に it-「ある・いる」という動詞が存在する事実をあげている。

大野の主張は説得力あふれるもののように思われるかもしれないが,その細部を調べるとほころびが生じる。たとえば,上一段活用動詞の場合,「奈良朝の形」と「推定の古形」との間に不自然な断絶がある。-ru の出現は連体形の類推によるものと見なすのであろうが,そもそも「推定の古形」に -u が付かないのはなぜかということについての説明が欠けている。また,*-i の存在を想定したことも難点の一つとして数えなければなるまい。なるほど,「有り」という動詞は終止形接辞として-iを有するが,ほかの動詞の終止形接辞がかつて *-i であったことを示す証拠は

見つからない。そして，*-i が「有り」の同義語であったろうという見解は，根拠が薄弱であるというよりも，自家撞着を起こしている。なぜなら，「有り」という動詞の組成は同義語の重なりということになり，このことは，「有り」と「居(う)」とは同義語であるがゆえに結合しなかったという大野自身の考えを否定することにつながるからである。

ところで，動詞終止形の形成に「居(う)」が関与したという考えはミラー(1986)の主張にも見られる。ミラーは満州語に -mbi という動詞形が存在することに着目し，これと古代日本語の動詞終止形とは組成が同一であると見なす。すなわち，満州語の -mbi というのは *-n(連体形接辞)に *bi「ある・いる」が付属したものであり，この「動詞状名詞＋*bi」からなる語形成こそ先古代日本語がツングース祖語から直接継承したものであると言う。

ミラーは，大野と違って *-i の存在を認めない。また，動詞「居(う)」はアルタイ祖語の *bü が *wu を経て u となったものであり，古代日本語における動詞終止形の多くは以下のように *wu を接辞化して成立したと述べている。

書く(四段)： *kak-wu＞kaku
当(あ)つ(下二)： *ata-wu＞atu
懲(こ)る(上二)： *körö-wu＞köru
朽(く)つ(上二)： *kutu-wu＞kutu
死ぬ(ナ変)： *šin-wu＞šinu
為(す)(サ変)： *s(u)-wu＞su
来(く)(カ変)： *kö-wu＞ku
有り(ラ変)： *ar-rī >ari

上に示したように，ラ変活用の「有り」に関しては，その終止形の形成に「居(う)」は関与しなかったとミラーも述べている。ミラーによれば，*ar-rī は名詞化接辞の *-rī が付いた動名詞を終止形に転用したものであるという。またミラーは，上一段活用の「居(る)る」の終止形 wiru は連体形が転用されたものであると述べているが，上一段活用をする動詞すべてについてその連体形が終止形に転用されたと見なしているかどうか不明である。

ミラーの主張にも問題がある。まず第一に，「有り」は動名詞が終止形に転用されたものだと言うが，そのような転用がなぜ起こりうるのかについての説明がな

い。[5] 第二に，満州語の -mbi における -m の前身 *-n は *-ga に由来する名詞化接辞であると考えられるが，古代日本語の動詞終止形には，そのような形態が存在したことをうかがわせる痕跡すらない。第三に，ナ変活用の「死ぬ」という動詞の *šin-wu＞šinu という説明は決定的な問題を含んでいる。そして，「死ぬ」という動詞の成り立ちを「死」という名詞と関連付けて考えたとき，*-wu あるいは *-u が付属して終止形が形成されたという仮定は根本的に崩れる。「死ぬ」の成り立ちを「死」と切り離して考えられないからである。*šin-wu＞šinu というミラーの仮定は，そのことを度外視している。「死ぬ」は，それと同じ意味のチベット語 shipa[çibə]が「死」を意味する shi[çi]に動詞接辞の -pa[bə]を付したものであるように，名詞の「死」に動詞接辞の -nu が付加されたものであろう。それゆえ，*ši-nu＞šinu という変化を仮定しなければならない。 なるほど， たとえばチベット・ビルマ語派のチョー語に sih「死ぬ」という動詞があることを根拠に *ši という動詞の存在を仮定したうえで，それに名詞化接辞の *-nu と「ある・いる」を意味する *-wu が付加されたという立論もできなくはないが，このような想定は「殺す」を意味する「殺す」には通用しない。「殺す」は，たとえばチョー語の m’sih「殺す」が sih「死ぬ」に他動詞化接辞の m’- を付したものであるように，「死」に他動詞化接辞としての -su が付加されたものであり，その生成に名詞化接辞 *-n の関与を仮定できないからである。同様に，「数ふ」「孕む」「股ぐ」「束ぬ」「曇る」も，「数」「腹」「股」「束」「雲」に -ɸu, -mu, -gu, -nu, -ru が付いて動詞化されたものであろうから，終止形接辞の起源を *-u に求めることは見当違いだということになる。*-u がその起源であると見なしたら，-ɸ, -m, -g, -n, -r などの子音が宙に浮いてしまう。これらの子音は，終止形以外の活用形が形成される段階で語幹の一部に組み入れられたのであって，はじめから語幹あるいは語根の一部であったのではない，と考えるのが自然である。

以上のように，先行研究には根本的な不具合がある。これに修正を加えるよりも，発想をまるきり転換しなければ問題解をはかることはできそうにない。そこでまず，動詞終止形とはそもそも何かということに思いを擬らしてみる。動詞終止形とは動詞の基本形である。したがって，動詞終止形接辞は動詞を動詞たらしめているもの，いわば動詞接辞であり，そのの起源を探ることは動詞接辞の起源

[5] ツングース諸語に連体形と終止形を形成する接辞として -ra や -a と並んで -rī や -ri といった形態が存在することを根拠にしているのであろうが，この事実は連体形が終止形に転用されたという考えを正当化するものではない。

を探ることにほかならない。このような認識に立ち，動詞終止形の成り立ちを日本語以外の言語をも引き合いに出しながら説明してみよう。

オーストラリア原住民語のイディン語には -daga-n という自動詞化接辞と -ŋa-l という他動詞化接辞があり，ワルング語には自動詞化接辞 -pi と他動詞化接辞 -nga がある。これらの接辞は，イディン語とワルング語における具格接辞と形が酷似している。そしてそれらは，*-ga，*-ti，*-ma の反映形として，あるいはその組み合わせとして説明することができる。たとえば，

（7） pama-*ngku* warrngu kuwuy-*nga*-n
男-能 女(絶) 死人-他動詞化-過去/現在
「男が女を死人にした(すなわち，殺した)」

というワルング語の例において，他動詞化接辞の -nga は能格・具格接辞の -ngku と形態的に類似している。そして，-nga も -ngku も *-ga の反映形であると見なされる。このように自動詞化接辞と他動詞化接辞を具格接辞の反映形と見なしうることは，アジア太平洋諸語のいずれの言語においても同様である。したがって，日本語においてもそのような形態が何らかの形で動詞の形成にかかわったと見るのはきわめて自然なことである。筆者の考えるところ，「股ぐ」などの -gu，「咲く」などの -ku，「食ふ」などの -ɸu，「倒る」などの -ru は *-ga の反映形である。そして，「立つ」などの -tu と「倒す」などの -su は *-ti の反映形，「住む」などの -mu と「転ぶ」などの -bu は *-ma の反映形である。また，「股がる」「転がる」などの -garu と「行ふ」「伴ふ」などの -naɸu は *-ga の反映形を二つ重ねたものである。

格標識がどうしてこのような接辞に転じたかについても筆者の考えを示しておきたい。これを行うための最初の手続きとして，イディン語の次の例文を引き合いに出す。

（8） waguda-nga dugi bunda:-*diŋa:l* gangula-nda
男-能 棒(絶) 叩く-具 ワラビー-与
「男が棒でワラビーを叩いた」

この例で注目すべきは，動詞に付属した -diŋa:l が具格接辞として絶対格の dugi と意味的に結合していることである。このように具格接辞などの格標識が動詞に付属しうるものであることを前提にして，筆者は，日本語における動詞接辞の起

源を以下に示すような格標識に求める。

(9)　風(副詞的)＋木(主語)＋倒-る(動詞-具格接辞)
(10)　男(副詞的)＋木(主語)＋倒-す(動詞-具格接辞)
(11)　男(副詞的)＋母(主語)＋懐し-む(形容詞-所格接辞)

これらは，過去に存在したと想定される構文を簡略化して示したものである。(9)〜(11)のいずれにおいても，動詞・形容詞に付属した格標識 -ru，-su，-mu が副詞的な役割を担った文頭の名詞と意味的に結びついていた。すなわち，(9)では -ru が「風」と結合して「風で」という意味を，(10)でも -su が「男」と結合して「男によって」という意味を表した。一方，(11)では -mu と「男」が結合して「男において」という意味を表した。なお，-mu がこのような所格的意味を表したという仮定は，たとえば「浜」「山」「谷(はざま)」「居間」などのように場所を表す名詞に -ma の付くものが少なくないこと，また -ma と同源と見なされる -ba(〜場)がまさしく場所名詞を構成することを一つの根拠にしている。

さて，(9)〜(11)はいずれも自動詞文であったが，(10)と(11)はやがて他動詞文に変わった。副詞的な要素であった「男」が主語となり，主語であった「木」と「母」が目的語に転じることによってである。そしてこの変化と並行して，-ru，-su，-mu は動詞接辞となった。そしてさらに，-ru は「余る」「移る」「起こる」「隠る」「離る」のように動詞が自然的・無作為的な意味を表すときに多用される接辞となり，-su は「余す」「移す」「起こす」「隠す」「離す」のように動詞が人為的・作為的意味を表すときに多用される接辞となった。一方，-mu は「楽しむ」や「悲しむ」のように形容詞を動詞化するための接辞になるとともに，「富む」「暗む」「病む」「住む」「止(や)む」のように自然的・無作為的な事態を表す動詞に多用される接辞となった。ここでついでに述べておくと，自発・可能・受身・尊敬を表すと言われる -ru/-raru と -yu/-rayu は自然的・無作為的な事態を表す -ru/-yu を基盤にしたものであり，使役・尊敬を表すと言われる -su/-sasu は人為的・作為的な行為を表す動詞接辞 -su を基盤にして形成されたものである。そして「行う」という意味の動詞「為(す)」と使役動詞の「させる」は，その -su/-sasが動詞化したものである。なお，動詞接辞の -mu, -ku, -gu, -tu，-ɸu, -bu などは動詞接辞以上のものとならなかったが，ビルマ語文語には動詞接辞から派生したと見なしうる mu「する」という動詞が存在することを付言しておきたい。

格標識が動詞接辞になったという上述の仮定は，日本語以外の言語にその種の現象を観察できれば，信頼性の高いものとなる。以下のイディン語の例は，格標識が動詞接辞になりうることを例証するためのものである。

(12) ŋayu　　yinŋ　bana　　gadula-ŋ*a:l*
　　私(主)　　この　水(絶)　　汚い-他動詞化
　　「私がこの水を汚した」

この例における他動詞化接辞 -ŋa:l はもともと具格接辞であり，ŋayu「私」と結びついていた。つまり，この文の本来の意味は「私のせいでこの水は汚い」であった。しかし，副詞的な要素であったŋayu「私」が主語となり，主語であった yinŋ bana「この水」が目的語に転じることによって，「私がこの水を汚した」という意味に変わった。こうして -ŋa:l がいわば「する」という意味の他動詞化接辞に変わったのである。日本語の「寒がる」「股がる」などの -garu(そして，「光る」の -karu)を彷彿させるこの-ŋa:lという接辞の存在は，日本語の動詞接辞が格標識に由来するものであるという仮定を支える傍証となる。なお，チベット・ビルマ語派のカチン語に見られるgalo「作る・する」，アイヌ語のkar「作る・する」，シュメール語のgál「ある・あらしめる・作る」といった動詞もイディン語の -ŋa:l や日本語の -garu と歴史的につながっているように思われるが，それを証拠付ける確たるものはない。

最後に，二つのことを述べてしめくくりたい。一つは，先の(7)のワルングの例に見られるような名詞の動詞化が以下のように日本語でも起こったということ，そしてそれが動詞接辞の形成後に生まれた派生法であるということについてである。

(13) 男(主語)＋肉(目的語)＋噛(か)-む(名詞-動詞接辞)

ここに見られる「噛(か)」は「歯(は)」の姉妹語である。また，それはシナ・チベット祖語の *nga「牙」とも同源である。このような名詞としての「噛(か)」に -mu が付加されて「噛(か)む」という動詞が生まれ，「歯(は)」に -mu が付加されて「噛(は)む」という動詞が生まれたのであるが，この -mu はすでに動詞化接辞としての資格を獲得していたと判断される。それを具格接辞と見なした場合，それと意味的に結びつく名詞が存在しないからである。仮に(13)の例において -mu が具格接辞で，それが付着する「噛(か)」をその先行詞と見なしたら，(13)は文としての体をなさなくなってしまうであろう。

もう一つ触れておきたいのは，ここまでの考察では解決されていない問題，すなわち「有り」の終止形が何ゆえに aru ではなくて ari であるかという問題である。ari という形態は，「有り」が補助動詞として使用されることが多かったために生じたものかもしれない。すなわち「有り」は，動詞連用形に接続してたとえば *sakiaru (咲き有る)のように用いられたものが一種の母韻調和によって *sakiari(咲き有り)に変じ，これがさらに sakeri(咲けり)に転じる過程の中で生まれたものかもしれない。この考えは推測の域を出るものではないけれども，「有り」の -ri をツングース祖語の名詞化接辞 *-rī と同一視するよりもましのように思われる。

引用文献

大野　晋(1982)，『仮名遣と上代語』岩波書店.

近藤健二(2003)，「祖形 *-ga, *-ti, *-ma の日本語反映形(前編)」『ことばの科学』第16号：145-165. 名古屋大学言語文化研究会.

庄垣内正弘(1989)，「チュルク諸語」 亀井　孝・河野六朗・千野栄一編著『言語学大辞典』第２巻：937-950. 三省堂.

知里真志保(1974a)，『知里真志保著作集』第３巻. 平凡社.

ミラー Miller, Roy Andrew(1986)，*A modest proposal on the origin of Japanese*. 馬渕和夫編『世界の言語学者による日本語の起源』57-103. 武蔵野書院.

山浦玄嗣(1989)，『ケセン語入門』(改定補足版)　共和印刷企画センター.